

ISO9001認証取得と サービスの質的向上

辻中浩司

社会福祉法人松美会 特別養護老人ホームアイユウの苑 事務長

はじめに

当法人は、特別養護老人ホームアイユウの苑を核とした、ショートステイ、デイサービス、ホームヘルプサービス、在宅介護支援センターの5種類に及ぶサービスの複合施設について、開設5年目の1999年10月1日、ISO9001の認証（審査登録）を取得した。社会福祉法人として、また、特別養護老人ホームとして、わが園で初めての認証取得であった。

認証取得においては外部のコンサルティング会社に頼らず、全職員の力を集結取り組んだ。認証取得までにおよそ1年を要し、予備審査受審の後、登録審査を受審し承認された。現在は認証取得から5年が経過し、その間、5回の定期維持審査を受審した。2002年9月には、3年ごとの更新審査を受審し、承認された。そして、開設10周年を迎える本年は、2回目となる更新審査を控えている。

ISO9001認証を 取得する意義とは

サービス管理者は、どのような質のサービスが、どのように行われているかという観点からサービスマネジメントを行わなければならぬ。私たち介護サービス提供者も例外で

はなく、サービス業として、自らの提供する介護サービスの質を明確に示し、提示したサービスの質を保証しなければならない。このことは、あらゆる商取引では当たり前のことである。

ISO9001は、質保証・質改善のための一つのシステムモデルである。このシステムモデルを適用するためには、「誰（顧客）に何（製品）を提供するか」を定義する必要がある。私たちの場合、顧客は「利用者およびその代理人（家族）」と考え、製品は「住み慣れた地域において、有する能力に応じた、その人らしい自立した日常生活ができるることを目的」とし、利用者の心身に加えられる介護学・看護学・栄養学・社会学・医学的知見に基づいた介入による状態変化（あらかじめケアプランとして表現され、さまざまなプロセスの集合的な結果として実現されたもの）、および、その過程で提供される介護サービスなど（接遇・プライバシーへの配慮・情報開示などの付帯サービスを含む）の総体」と考える。

ISO9001認証取得の意義は、自分たちの提供する製品を明確にし、顧客の要求を満たすことを目指す組織となり、さらなる継続的改善を進める仕組みをつくることにある。

ISO9001認証取得と 維持審査・更新審査

当施設では、開設から4年が経過し職員が業務に慣れてきたころからマンネリ化傾向が見えてきた。具体的には、次のようにスタッフの都合を優先した低レベルな業務となっていた。

- ① 2時間65日の継続した介護サービスの中で、その日、その時間に勤務するスタッフによってサービスの質に大きなばらつきがあった。
- ② 一人ひとりの利用者に対してどのように対応するのかということさえスタッフ間で共有できていなかった。サービスの質が極めて不安定な状態であった。
- ③ 誰が見てもすぐわかるような問題点が多くあっても、見て見ぬふりをする状態であった。
- ④ 職員が忙しそうにばたばたし、利用者に対して「ちょっと待ってください」といいう言葉を連発していた。
- ⑤ 若者などについても、何の対応もしないで終わることが常態化していた。
- ⑥ 年度目標は掲げられているが、具体性に欠け、誰も理解していなかった。
- ⑦ もう少しで大きな事故につながるような事態が起つていても、何も改善されず、報告されていなかった。

このような状況に対して、「これでいいの?」「このままではいけない」「変わらなければ」という、自分たちへの疑問と反省といら立ちが、ISO認証取得に向けた取り組みへのきっかけとなった。その前には介護保険

法が成立し、契約により利用者から選択される福祉が見えてきたところであった。

ISOは、もともと製造業のための規格で、品質を保つためには最終製品のチェックだけでは限界があり、原材料の調達から技術開発、生産工程管理まで総合的に管理することと一定の水準を保つという考え方である。この考え方は、当法人の介護サービスにおける日常業務にはほとんど当てはまつた。つまり、これまでの「流れ作業のように行われてきた」品質そのものが「あいまいな介護サービス」を、「標準化された介護サービス」として確立し、そのサービス提供について、顧客満足を念頭に置いたシステムとして構築することを可能にするツールが、ISO9001だったのである。

ISOの考え方のよい点は、主に次のようない点にあると考える。

- ・自分たちで自分たちの目標（サービスの質）を決めることができる。
 - ・決めたことは必ず遂行する仕組みができる。
 - ・定期検査により、仕組みを恒常化させることができる。
- 仕組みとは、仕事の進め方をルール化して、誰が行っても同じ仕事ができるようにすること。つまり「標準（決まり）」のことである。

私たちの目的は、ISOの認証取得ではなく、「業務改善」が大前提である。これを念頭に置きながら、これまでの手順を標準化し、文書化し、それに沿って業務を行い、結果を記録に残すという仕組みをつくった。そして、この仕組みがISOの要求項目を満たしている

かどうかを確認しながらシステムを構築した。このように、ISO認証取得への取り組みの中で、顧客の視点で介護サービスの質について意識し、自分たちで自分たちの介護サービスの基盤をつくり上げることができた。

さらに、年2回の内部品質監査（自分たちで自分たちの決めたルールが守られているかをチェックする仕組み）を行ってサービスの質を維持しながら、1年ごとの定期検査（拡大・更新審査を含む）を受審してきた。これまで当施設では、福祉分野の変化に伴って、次のような大きな変化や動きがあった。

- ・介護保険制度のスタートに伴う対応
- ・新規事業（居宅介護支援事業、訪問看護事業）の立ち上げ
- ・第三者委員による苦情解決のための仕組み創設

- ・身体拘束ゼロの推進
- ・個別ケアのニーズの高まりの対応
- ・個人情報保護法への対応

ISOの品質マネジメントシステムがあると、このような変化や動きが無意識のうちに業務の中に取り込まれていく。われわれの仕事とISOの品質マネジメントシステムがうまく融合していくのである。また、定期検査を積み重ねるたびに、システムのレベルが少しずつ高まっていることが実感できる。マニュアル改訂を積み重ね、介護サービスを取り巻く環境の変化に伴って、業務について随時改めて大きな役割を果たしている。

当施設における サービスの質の担保

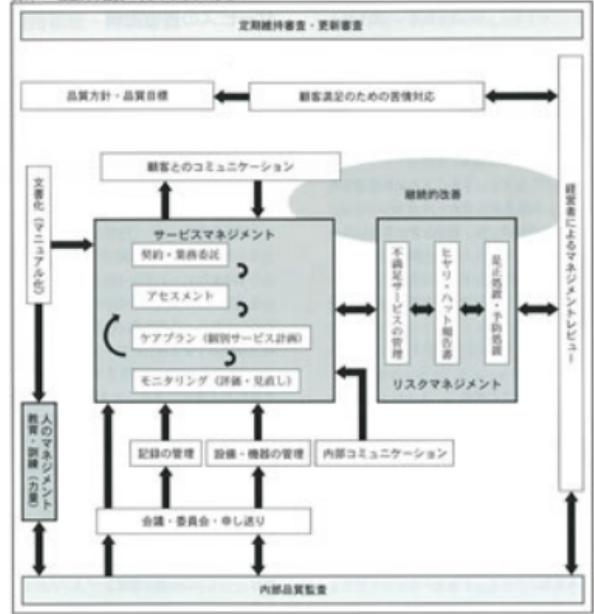
ISOの認証取得を考えた時に、こうしてつくり上げたシステムが、ISO9001の要求項目に適合しているかどうかが問題となる。要求項目に適合するためには、業務手順を文書化することが重要であり、さらにその過程が重要である。

そのため、一つひとつ業務を文書化していく過程において、その業務にかかわるすべての職員の業務について吟味した。十分に味することで、職員への意識づけになり、自分たちで決めたルールだから自分たちで守るという「当たり前のことが当たり前にできる仕組み」となる。その結果、利用者および家族に「このようなシステムで、このようなサービスを提供させていただきます」というものを目に見える形にできるのである。「サービスマネジメント」と「リスクマネジメント」を車の両輪とする、教育・訓練された運転手（職員）が車を走らせるというイメージのシステムである（資料1）。

そしてこのシステムは、内部品質監査・定期維持審査・更新審査で維持されると共に、組織の中に「P(Plan)計測」「D(Do)実行」「C(Check)確認」「A(Action)処置」というPDCAサイクルが数多くつられ、それぞれのサイクルが循ることで少しずつ継続的に改善される。

当法人におけるサービスマネジメントについて、その要となっているのが、「業務マニュアル」（資料2）「日誌表」（資料3）および「個別サービス計画表」（資料4）である。

資料1 当法人の品質マネジメントシステム



業務マニュアルは、介護の手順を統一し、誰が行っても最低限の同じサービスが提供できるように作成した。業務マニュアルどおりに行えば、新人職員でも基準となるサービス提供ができる。

日課表は、職員が行うべき業務を時間ごとに示し、職員に対して、決められた時間に決められた業務を実施することを義務づけたものである。

個別サービス計画表は、利用者に提供する

資料2 業務マニュアル（宿泊）

業務マニュアル（宿泊）

- ※入浴開始約5分前より、特徴対象者の面接を開始する。
- 面接の方法には、次の2通りある。
●1:1で移乗を助し、浴室内で待機していただく。面接が済またら車いすから搬送用ストレッチャーに移乗を助し、浴室へお送りする。
-「今からお風呂に入りますよ」
-「ストレッチャーに移りますよ」
●搬送用ストレッチャーで駆けベッドまで迎えに行き、移乗を助ける。直接浴室へ搬送する。
-「今からお風呂に入りますので、ストレッチャーに乗っていただきますよ。よろしいですか？」
- ※浴室介助担当者は、入浴周介助エプロンを着用する。
- ①搬送用ストレッチャーの上で、「○○さん、お風呂に入りますよ。脱を脱ぎますが、よろしいでしょうか？」声かけをしながら、脱衣介助を行う。
-既存機能を生かしていただけるよう、また、安全・安楽に配慮して行う。
-「脱、着用」に気を配る。
-「腰を上げていただけますか？」
-「脱を脱ぎますのでできるところはご協力ください」
-着ていた衣服は、既存机のカートに入れれる。
-おむつはナイロン袋に入れる。
-面接便のあった利用者は下用タオルで拭く。
-「お肌が汚れていますので、タオルで拭きましょうね」
-下用タオルは別のナイロン袋に入れる。
-※感染症の方の衣服はボリバツを入れる。
- ②滑り止めシート・バスタオルを脱いた入浴用ストレッチャーに2人で移乗介助を行う。その際、渡衣剝離のためややすい利用者には配慮して行う。
-「入浴用ストレッチャーに移りますよ」
-「職員にしっかりつかまってください」
- ③入浴用ストレッチャーの安全ベルトを締め、面リ棒を握っていただく。
- ④搬送用ストレッチャー上にバスタオル・着替入・おむつを準備する。
- ⑤自分の手で湯温の確認をし、シャワーを使って足からかけ湯をする。その際、声かけをしながら湯温は適切か確認する。反応のない利用者の場合は、職員の手で確認する。
-「シャワーをかけてみてもよろしいですか？」
-「熱くないですか？」
- ⑥頭髪を洗う。洗っている際に「かゆいところはないですか？」など聞き、訴えのある時は利用者の希望に沿う。
-「頭から洗いますが、よろしいでしょうか？」
- ⑦洗顔または顔拭く。
-「顔も洗いましょう」
- ⑧体を洗う。
-「体を洗いましょう。かゆいところがあったら言ってください」
- ⑨耳垢がたまっていたら傳擦をする。
-「耳をきれいにしましょうね」

資料三：自體內（當時）

17:00	申し送り 10 計画介紹、移乗・移動介助 20 ↓記録 30 食堂準備、食堂説導 40 ↓おしおり配布、手招看護、配茶 50 指示交換、食事見守り	20:00	↓ 10 ↓ 20 記録 30 巡回、水分補給、必要者のみバイタルサインチェック 40 ↓看護師へ利用者の状態を報告し指示を受ける、記録 50 ↓覚熱者への対応（枕木の使用、水分補給など）、記録
18:00	配膳、食事介助、見守り ↓配膳、薬剤介助、下駄、摺取量チェック、 口腔ケア 20 ↓ 30 食品の巡回、移乗・移動介助、排便介助（トイレ） 40 ↓食堂連絡、わいぼり洗濯 50 ↓エプロン洗濯、エプロン干し	21:00	巡回、消防、常夜灯をつける、居室説導、排便介助、記録 30 記録
19:00	↓ 10 ↓ 20 記録 30 巡回、排便介助（おむつ交換）、体位変換、 戸締まり確認、カーテンを開める 40 ↓冷暖房、換気扇の調節 50 ↓	22:00	巡回、排便介助、体位変換 30 ↓記録
		23:00	排便介助、巡回、必要者のみバイタルサインチェック、記録
		30	
		0:00	仮眠（0:00～2:00）

介護サービスを時間ごとに示したものであり、決められた時間に決められたサービスを提供することを事業者が利用者に対して約束するものである。

また、介護サービスの質を考える上で、「時間」は重要な因子である。あいさつ・歓迎などの「接遇」や食事介助・排泄介助などの「技術」は、時間の影響をそれほど受けないが、細胞や散歩など「利用者のとかかわり」は、時間の影響を大きく受ける。これらは時

教育・訓練で一定の質を担保することが可能である。しかし利用者とのかかわりについては、時間的余裕を確保しなければ、その質を担保することができない。時間的余裕は、そ

の時間に提供すべき介護サービス総量と比較して職員数が多い時、または職員数に比べて提供すべき介護サービス総量が少ない時に生み出される。つまり、介護サービス量と職員数によって、かかわりの時間（時間的余裕）が決まることになる。

資料五 優質零售業者（續四）

とで、提供すべき介護サービスの質・量を明確にし、サービスを提供するために必要な職員数を定めている。それによりあらかじめかかわりの時間を確保し、より充実した個別ケアを展開している。

今後の課題

今後の課題としては、個別ケアを推進すること、サービスの質を明確に示し保証することという難易度が高い2つの問題を同時に低コストで実現しなければならない。低成本を考えた場合に、マニュアル以上の柔軟な対応で大きな感動を与えることよりも、誰がサービス提供しても、少なくとも利用者が不満にならないという最低限の質保証に力を入れることが重要になってくる。今後の介護

組織改定などを見据えると、介護サービスの質・量を自在にコントロールできる仕組みが必要であると考えている。

ISOの認証取得は目的ではなく、あくまで品質マネジメントシステムモデルにすぎない。質保証・質改善のためにどう使うかが重要である。

引用・参考文献

- 上原鳴美編：医療の質マネジメントシステム～医療機関におけるISO9001の活用。日本規格協会、2003。
- 辻中浩司：福屋経営マネジメント 品質マネジメントシステムISO9001認証の実践と展開法。月刊福屋。2003年7月号。P.74～77、2003。
- 辻中浩司：福屋経営マネジメント 品質マネジメントシステムISO9001認証の実践と展開法。月刊福屋。2003年8月号。P.76～79、2003。

介護人財育成 Vol.2 No.3

発行日：2005年7月15日

企画：日研出版グループ

発行：日研出版株式会社

編集人：中野義之

発行人：中野良平

お直通番号センター 030-057671 FAX 030-052690

本部 〒101-0011 東京都千代田区永田町2-7-16 (日研出版ビル)

北海道 〒001-0001 札幌市中央区北1条西2-2 (日研出版ビル)

札幌 〒001-2021 札幌市中央区北1条西2-2 (日研出版ビル)

沖縄 〒901-0001 琉球新報ビル (日研出版ビル)

東京 〒101-0001 東京都千代田区永田町2-7-16 (日研出版ビル)

奈良 〒501-0046 大阪府奈良市西新屋町3-7-15 (日研出版ビル)

名古屋 〒451-0001 名古屋市中区新栄町3-7-15 (日研出版ビル)

大阪 〒541-0003 大阪府大阪市天王寺区天王寺本町1-10 (日研出版ビル)

広島 〒730-0043 広島市中区大手町1丁目1番地 (日研出版ビル)

福岡 〒811-0011 福岡市博多区博多駅前2-20-15 (日研出版ビル)

鹿児 〒891-0001 鹿児島市西新町3-7-15 (日研出版ビル)

沖縄 〒961-0012 沖縄県那覇市若狭町上野原1-10 (日研出版ビル)

直通 030-057671 FAX 030-052690

「お問い合わせセンター」は、専門知識や研究会の最新情報を問い合わせることができます

nissoken.com

E-mail: 123@nissoken.com

お問い合わせセンターへお問い合わせの際は、必ず「お問い合わせセンター」とお名前を記入して下さい。

編集 木本雅之 増山幸夫 長島久美子 近藤秀明 望山尚広

高橋洋介 萩原英男 朝原利之 小林裕樹 西脇和紀

北原 浩 国川圭一 古田篤人 伊豆志乃 山下和輔

竹本龍子 青森尚子 佐内裕枝 吉田真理加 小野嶋千

山西勝子 宮澤正志 高井久和也 中山幸代 三輪ゆづみ

中村誠子 山田留美 田中俊美 鈴江豊臣 加藤恵治

毛 犬 佐吉 渡辺昭義 小林 太 野木一希 平沼孝輔

内林裕子 木村信夫 長崎秀二 今野昭彦 末山記洋

鈴木智美 田中直子 阿部雅也 鎌本和己 吉野伸子

高橋智美 丸山洋貴 高橋克和 久石和也 梁昌 春

高橋智美 田中直子 佐野志郎 小川つかさ

高橋知津 大庭康志 真 直樹 小向慎一 大庭康志 齐士博行

大庭知津 真 直樹 表木智 芥川理恵

九 川 由近成人 木村隆之 西泽和也 鹿本直勝 鶴田 敏

鷲尾日出 下西信子 有 直樹 鹤川和子 伊口久美子

高橋日出 小島信次郎 渡岡大輔 中 亮 宇山敏大郎

川村智達 須川 伸 岩田典典 田中 伸一 岩田典典

高橋智達 田中 伸一 岩田典典 田中 伸一 岩田典典

吉田幸子 大久保伸哉 山木加喜子

お直通番号センター 030-057671 山崎香苗 山中洋子 斎藤慶輔

青山元美 安藤英一郎 山内恵之 王聖強二

野田由紀子

初 声 田村日暮 木泽雄也 竹中万由美 鈴江豊臣